カンボジア選挙監視を体験して

田丸純子（埼玉大学教養学部国際関係論コース）

カンボジアではまだ、たくさんの不正が平気で行われていました。Vote buying に始まって、自党が勝ったときのみプレゼントと引き換え可能なクーポン券の存在、焼かれてしまったIDカード、そしてパイリンでは、殺人事件もありました。神の前で自党に投票するように誓わせたり、自党のところに印をつける訓練をさせたりなど、信じられないような不正も行われていたようです。投票箱を天井につるしておいたダミーとすりかえるだの、一時間くらいしたら書いた文字が消えるペンだの、中には野党の根も葉もない噂もありました（嘘だとは思いつつ天井を確認したり、ペンを使ってみたりしてしまったのですが）。そして、公共機関の人々が中立ではありませんでした。私達のチームがバッタバンの Governor のところを訪れたときも、与党寄りの governor は与党の有利になりそうなことばかり発言していました。（うまく聞き取れなくて教えてもらった話によると）与党に不利な質問をされると、口数が少なくなったり、黙り込んだりしたそうです。警察も同様で、バッタバンの警察のトップに面会した場所は、なんと野党の事務所でした。彼いわく、自分は今私服だからオフであり、個人としてどの政党を支持するかは個人の自由だとのこどでした。しかし、警察としてインタビューを受けているのだから、オフもへったくれも無いのでは・・・というのが私の感想でした。その上その場で彼は、警察は中立だ、と言っていたので面白かったです。

そして同時に、与党の圧力というのもとても強く感じました。開票日にたくさんの白紙表や無効票が存在しており、私は最初それを選挙のやり方がわかってないかだと思っていたのですが、その数はあまりにも多すぎました。それこそが、与党の圧力によるものだったそうです。与党に投票しなくてはならないけれど、本当はそうしたくないから、わざとおかしなことをしてなんとか無効票になるように仕向けているのだそうです。しかし、その願いもむなしく、沢山の票が有効票としてカウントされ直していました。

選挙監視中に見たニュースでは、そこで報じられているのは vote buying のことのみでした。実際に現地に赴かないと、上記のようなことはわかりません。そういったことを肌で感じることができ、それがとても面白かったです。しかし同時に、私が見たり聞いたりしたことは一つの側面に過ぎないとも感じました。地域が少し違うだけで、まったく違った情景が展開していました。しかし全体的には、１９９８年の選挙に比べ、表立った暴力や脅迫は減り（水面かではまだまだ存在しているそうですが）、だからこそ技巧を凝らした不正が表に出てきているという感じでした。人々は政治に対するあきらめを覚えはじめているという話も聞きましたが、前回よりも今回はずっと良くなり、今度はもっとよい選挙が行えるのではないか、そういった希望を抱くこともできました。

私が良いなと思ったのは、人々の期待を集める野党の存在です。その政党のキャンペーンでは、若い人や子どもが自分の意志で集まってキャンペーンに参加し（お祭り騒ぎのようなものにせよ）すごく楽しそうにしていました。日本には無い光景で、羨ましさを覚えました。そういった存在があること、それはこの国の人々の政治参加を促す手助けになると思います。